障害者の不安和らげる

カームダウン・クールダウンスペース

空港から広がる「落ち着く空間」

発達障害や自閉症の人が人混みや騒音など日常と違う雰囲気が原因で感情が高ぶるなどのパニックになった際に利用してもらう「ブース」を設ける動きが広がっている。ブースは「カームダウン・クールダウンスペース」と呼ばれ、東京五輪・パラリンピックを機に空港など公共施設で設置が進んだ。2025年大阪・関西万博の会場でも設置される予定で、関係者は「大阪万博が今後の普及の試金石になる」と期待する。（藤谷茂樹）

大阪万博に向け開港以来最大の改修が続く関西国際空港。昨年10月、第1ターミナルに完成した国内線新エリアにカームダウン・クールダウンスペースが2カ所開設された。

同スペースは通路の端にパーティション（高さ1・7㍍）で区切られた約2平方㍍。内部にはソファ、壁には吸音素材を採用した。関空を運営する関西エアポートの担当者は「できるだけ騒音は届かず、照明の直下を避けた」と説明する。

パニック症状になった際、静かな場所で15～20分過ごすと落ち着くとされており、こうした場を提供する意味合いがある。日本発達障害ネットワーク理事長で児童精神科医の市川宏伸さんは「落ち着かせることが重要。なだめようと話しかければ、余計に興奮してしまう」と話す。同団体などは以前から、公共施設内などで設置を進めていくよう訴えてきた。

関西国際空港第１ターミナルに設置された「カームダウン・クールダウンスペース」

東京五輪が契機

同スペースへの関心がにわかに高まったのは、東京五輪・パラの開催。政府は平成29年2月の「ユニバーサルデザイン2020行動計画」で、訪日客の玄関口となる成田、羽田両空港で、多くの人が利用しやすい世界トップレベルのユニバーサルデザイン水準の達成を目指すとした。

これを受け必要な設備や対応を検討した成田空港は30年1月、同スペースを設置。羽田、関空、中部など主要空港も続いた。

東京五輪・パラのメイン会場として令和元年オープンの新国立競技場（東京）では個室タイプが設けられ、他の公共施設でも設置事例が増えている。同スペースを表す絵文字「ピクトグラム」も作成され、JIS規格に登録された。

ただ、各設備は広さや設置場所、照明、遮音性などはまちまち。仕様の統一基準がないためだ。世界標準を探るイベントになるはずだった東京五輪・パラは無観客開催に。ユニバーサルデザインに詳しい東洋大の高橋儀平名誉教授は「無観客になり、設置者は検証しようにもできなかった」と話す。

万博は試金石に

関係者が注目するのは大阪万博だ。日本国際博覧会協会は専門家らのワークショップで協議し、会場入り口など8カ所に同スペースを設ける方針だ。また、パビリオンの出展者にガイドラインを提示。室内が暗い、光や大きな音の出る演出があるなど同スペースの設置が望ましい事例を示している。

高橋氏は「万博は多様性への対応が求められ、海外を含め率直な意見を受け止める場となる」と指摘。「スペースのあり方の今後の指標になる」と期待する。

カームダウン・クールダウンスペース
発達障害、知的障害、認知症などのある人が精神的にパニックになった際、冷静になるためのスペース。「落ち着く」（Cool down）、「冷静になる」（Calm down）という英語を2つ重ねた。海外では「センサリールーム」との名称もある。

カームダウン・クールダウンスペース設置のポイント

※交通エコロジー・モビリティ財団の資料を基に作成

ふじや・しげき

発達障害や精神疾患は、その見た目からは症状や本人のつらさがわからず、偏見にさらされることが多いと聞く。必要な機能の見極めはこれからだが、このスペースを目にして「必要とする人」がいると知り、障害や病への理解も広がることにつながってほしい。

「カームダウン・クールダウンスペース」の設置や開発の主な事例　※写真はいずれも提供

大阪府河内長野市立図書館

- 「よむ・きく・やすむへや」として平成30年から運用
- 知的障害者への配慮を考える研究会での専門家の意見から設置を決めた

コクヨ（大阪市）

- 本社に4つのブースを設置し音や衝撃を吸収する壁、温かみのある照明を採用。6月から本格始動
- 障害のある従業員の意見を取り入れオフィスを改装

オーエム機器（岡山県総社市）

- 「MOMOTTE（ももって）カームダウンスペース」を8月に発売
- 足元の隙間から内部の安全確認も可能。商業施設での実証実験を経て開発

オフィスなどにも 理解と設置進む

東京五輪・パラリンピックを機に、徐々に浸透しつつある「カームダウン・クールダウンスペース」。空港以外の公共施設や、民間オフィスなどに設置が広がっているほか、メーカーも工夫をこらした商品を開発。今後さらに普及が進みそうだ。

大阪府河内長野市立図書館では平成30年11月、個室の朗読室をパニック時に休むためにも使えるようにした「よむ・きく・やすむへや」を設けた。知的障害者が過ごしやすい環境整備を考える研究会に参加した際、専門家から提案を受けたという。

この設置例を知った大阪府立中央図書館（同府東大阪市）は今年２月、仕切り板にいすを設けた簡易タイプで運用を始めた。同館は「まずは設置することが大事。利用者の意見から改善を図りたい」と話す。

民間企業にも取り組みは広がる。文具メーカー、コクヨは６月、大阪市東成区の本社オフィスの改装で、ブースで区切られた「カームダウンエリア」を新設した。

設置にあたり、身体・精神障害者を雇用する特例子会社、コクヨKハートの従業員らの意見を取り入れ、間仕切りを高くしたり、明るさを調整できたりと、より落ち着きやすい環境を整えたという。

コクヨが本社内に設置した「カームダウンエリア」のブース内。明かりの調整ができるなど工夫を凝らした（同社提供）

商品開発も活発化してきた。岡山県総社市の建材メーカー、オーエム機器は８月、「MOMOTTE（ももって）カームダウンスペース」を発売した。開発過程では、外からも内部の安全確認をしやすいよう、足元の開口部を広げるなど改良。商業施設内での実証実験から得た知見を生かした。

開発部の湯浅誠二部長は「障害者の就労支援施設からの相談で必要性を知り、開発に取りかかった。大学や市役所、図書館などさまざまな施設から引き合いが来ている」と話す。

Copyright © The Sankei Shimbun. All rights reserved.掲載記事、写真の無断転載を禁じます。